

大気化学研究会ニュースレター

- No.4 -

Autumn 2000

大気化学研究会役員選出について(公示)

大気化学研究会会則の選挙細則に基づいて下記の要領で第二期運営委員会役員を選出しますので、会員の皆さまのご協力をお願いします。当該年度の会費を納入したすべての会員に選挙権、被選挙権があります。

役員選出日程

2000年10月	ニュースレター4号による公示と郵送による投票の開始
2000年12月1日(金)	投票締め切り(選挙管理委員会必着)
2000年12月4日(月)	開票、結果公表(電子メールとニュースレター5号に掲載)
2001年1月	総会にて承認
2001年4月	新運営委員会活動開始

選挙要領

1. 選出役員数: 運営委員会役員、12名、うち1名を会長とする。
2. 投票の締め切り: 2000年12月1日(金)までに選挙管理委員会へ必着のこと
3. 投票用紙送付先: 〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1 東京大学海洋研究所植松研究室内
大気化学研究会選挙管理委員会宛
4. 投票方法: 投票用紙に6名を連記(内1名は会長への投票)した後、投票用封筒に入れ、密封したうえで、さらに郵送用封筒に入れて送付する。なお、投票は無記名とする。
選挙管理委員会 植松光夫(委員長)、中澤 高清、中根 英昭、梶井 克純

選挙細則

第1条 大気化学研究会運営委員会役員を選出に係る本細則の設置は、研究会会則によって定める。

第2条 選挙管理委員会は次の事業を行う。

1. 選挙の公示
2. 投票および開票に関する事務
3. 当選の確認と公表
4. その他選挙管理に必要な事項

第3条 選挙管理委員は、会則第5条によって会長が運営委員より4名を委嘱し、委員長は互選とする。

第4条 選出すべき運営委員会役員は、当該年度会費を納入したすべての会員〔以下会員という〕同士の互選とし、会員は選挙に際して選挙権と被選挙権を有する。

第5条 役員任期を2期連続した者は被選挙権をもたない。

第6条 選出すべき運営委員会役員およびその定数は以下の通りとする。

会長 1名、副会長 1名、幹事 5名、運営委員 5名

第7条 選出すべき運営委員会役員として6名を無記名投票する。うち1名を会長への投票とする。会長への投票数は、運営委員会役員を選出のための得票としても数えることとする。

第8条 当選者は得票数の多い順に選出され、得票同数の場合は抽籤によるものとする。

第9条 副会長は選出された運営委員会役員による互選とする。

第10条 幹事と運営委員の別は、新たに組織された運営委員会において決定する。

この細則は2000年6月1日から実施する。

アスペン会議 (Integration and Synthesis Project: Community Review Meeting) 報告

地球フロンティア研究システム 秋元 肇

1990年に始まったIGBPは最初の10年がすぎて、今各コアプロジェクト毎のIntegration and Synthesis(集約と統合)が行われている。具体的にはこの10年間で何が分かったかをまとめた本を各コ

プロジェクト毎に出版する計画で、IGACでもこの流れに沿って来年の出版に向けての準備が進んでいる。今回の会議はその一環で、これまでに書かれた原稿のレビューを行い、8月一杯に改訂原稿を完成させるためのステップである。会議は米国コロラドのスキーリゾートであるアスペンで2000年4月27日-5月2日に、実質6日間にわたって行われた。参加者はIGACコミュニティから延べ約100名、日本からは小川利紘、近藤豊、秋元肇の3名が参加した。

IGACのI & S Bookの基本的な章立ては、Introduction, Atmosphere-Biosphere Interactions, Photooxidants, Tropospheric Aerosols, Instrumentation, Modeling, Future Strategy, Synthesisとなっている。会議の最初の4日間は各章の概要説明とそれぞれの章に別れての執筆者会議に費やされ、日本から参加したわれわれ3人はともにPhotooxidantsの分科会に参加した。IGACの様な非常にリベラルなコミュニティでさえ、黙っているとほとんど欧米の文献中心にまとめられてしまう。その意味で今回この章以外に、日本人の参加者が一人もいなかったのは残念であった。

会議の5日目と6日目にはFuture Strategyの章の内容を議論するためのCACGP主催のワークショップがもたれた。ここでの議論の基調は「Integration and Linkage」で「地球システム」をより強く意識した人間活動-大気圏-水圏-生物圏の統合的研究、化学-物理学-生物学のリンク、成層圏・対流圏の研究の一体化、都市大気汚染研究と地域大気汚染研究とのリンク、対流圏化学と衛星コミュニティとのリンクの重要性などが議論された。

インターネットなどがいくら発達しても、顔を合わせて議論することの重要性は減るどころか、逆に高まっていることが実感された。会議が増えてますます忙しくなるわけであるが、まるまる1週間をかけて議論するに値すると思っただけの多くの人が参加したことに思いを馳せたい。

第6回大気化学討論会の開催報告

名古屋大学太陽地球環境研究所 長田和雄

平成12年5月31日(水)から6月2日(金)にかけて、三重県鳥羽市の鳥羽国際観光ホテルにて第6回大気化学討論会が開催されました。今回の総出席者はちょうど100名で、盛況だった昨年(117名)にはおよばなかったものの、場所を考えればまずまずの規模となりました。当初は下呂温泉も候補に挙がりましたが、交通アクセス(夜8時でも東京まで帰れる)などを考慮の結果、鳥羽のヤマハリゾートに落ち着きました。今回の討論会開催にあたってはいろいろと不手際もありましたが、幸い懇親会も盛況で、ホテルの懇親会料理についてはおそらく多くの方にご満足頂けたものと思います。発表は口頭発表が36件に昨年から導入のポスター発表が30件でした。発表件数としても、昨年の77件から若干減りましたが、討論会の実質的なアクティビティーとしては昨年と同様に活発であったと思われます。しかし、討論会期間を通じて3日間ともご出席可能だった先生方はそれほど多くはなかったのが残念です。もっとも、プログラムを決める側としては、ちょうどいい案配に皆さまの都合が分かれており、プログラムの作成は思い悩むこともなく自動的に大枠が決まってしまったのが幸いと言えば幸いでした。発表申込を募る際には、「はたして鳥羽くんたりまで何人くるのだろうか?」と若干弱気になっており、始めはポスター枠・口頭枠のような仕切りをせずにおりました。発表申込の時点で「ポスター希望」との方もおりましたが、鳥羽のようなところでもこれだけ集まるのであれば、これからは開催案内の時点から「ポスター枠」を作っておく方が良いのかもしれない。

次回は大阪府立大学の板東先生のグループでお世話していただけると伺っております。普段いけないところにいけるまたとないチャンスとして楽しみにしております。

オゾンシンポジウム 始末の記

国内組織委員会事務局幹事 柴崎 和夫

第18回(小川説、19回がR. Bojkov氏説)のオゾンシンポジウムを、初日受付の大騒ぎから始まり、大ボカに気付かされて青くなった2日目、最後には台風のおまけまでつきながらも、無事終了する事ができて心からほっとしている(まだ結構大きな残務整理はあるのだが)。今回のシンポジウムでは、残念ながら、私個人は一つの講演さえも最後まで聞く機会をとうとう持てなかったのが、事務局という舞台の裏側にいて経験した国際オゾンシンポジウム(QOS)について報告(感想)を述べてみたい。今回のQOS各セッションの内容は「天気」に報告をするので、そちらを参照してほしい。

私がQOSに始めて参加した、1988年ドイツ、ゲッチンゲン(当時マックスプランク研究所にいたP. Fabian氏が主催者)で、林田さん、牧野さん達と何時か日本でも開催したいと、夜のレストランで話し合ったのが今回の開催招致の伏線となっている。当時はオゾンホール発見に沸き立ち、皆が興奮していた気がする。また対流圏オゾンのセッションが独立して開かれた最初のQOS(多分)でもあった。8年後イタリ

ア、L'Aquila（始めて第18回と回数が明示された）での開催が近づき、次回2000年は是非日本でと皆が漠然と考えていたときに、小川さんが決断をして2000年日本へ招致の手紙をIOCへ送ったのである。開催地に関して、開催期日、梅雨を考慮し、オゾンになじみがあり、地の利のある研究者がいるということで、最終的に皆が札幌（北大）と決めた。2000年という区切りであり、他国も立候補したが、最終的には日本の関連研究者全員の熱意が認められ、欧米以外では初のQOSを札幌で開催することが決まったのである。

さて本格的に事務局の仕事を始めたのは、第1回案内の連絡からである。今回は連絡・投稿等すべて電子メールで行うこと、そしてQOSでは初めての試みで、プロシーディングスを会議開催時までに発行する計画であった。組織委員長である小川さんが宇宙開発事業団に移ったので、事務局を事業団内(EORC)におき、ホームページ、電子メールのサーバーもすべてEORCのお世話になることにした。事務局幹事として私が任命を受け、第1回案内を開催2年前の1998年9月、そして第2回案内を1999年6月に送った。このころまではまだそれほどの忙しさはなく、組織委員会メンバーにも緊張感はなかった。まだ実際の会議をイメージできなかったといった方がよいだろう。

最初の山は、アブストラクト投稿締め切りの昨年12月15日前後であった。半ばは予想していたが、一時に多量の投稿があり最終的には1月一杯位かかっておよそ580編の投稿に受領の返事を送った。このときに、適切に皆の手伝いを依頼していたら、後の大混乱と手違いは起こらなかったであろうと反省している。後はメールと格闘し、5月20日の最終原稿投稿締め切りから、役割分担の確認、正式事前登録締め切り、プロシーディングス印刷、ビザ申請手伝い、プログラム決定のお知らせ、札幌情報の連絡、各種手配等々、嵐のような何ヶ月かがあつという間に過ぎる。ハッカー問題でEORCのサーバーが外部から接続不可になったり、メールサーバーに負荷をかけすぎてダウンしたり、私が勝手に判断してプログラム委員会やIOCから叱責を受けたり、組織委員会の他の方に大きな負担とご迷惑をかけてしまったことも数多い。指揮者を任せられた身としては落第であろう。

最終的には39カ国から370名余りの参加と、400編以上の発表があり、赤字もなんとか回避でき、台風も直撃せず、皆が取りあえずは良かった・成功だ（外交辞令としても）と言ってくれて会議は終了した。実際に会議を切り盛りしたのは私ではない。現地札幌の総指揮者としての山崎さん、塩谷さん、財務担当長谷部さん、コーヒー・和菓子のみならず多くの知恵で手助けいただいた林田さん、神沢さん、組織委員長としてふがいない私を何とか最後まで支えてくださった小川さんには、感謝のしようがない。EORCの佐野君と田辺さんにも記して感謝したい。岩上、内野、近藤、笹野、高橋、中根、牧野の各組織委員の方々にも心からお礼申し上げたい。次回は4年後、ゆっくり講演を聴きたいものだ。

第4回大気化学研究会運営委員会議事録

日時：平成12年5月31日（水）20:30-22:00

場所：鳥羽国際ホテル（大気化学討論会会場）

出席者：秋元 肇、中澤 高清、岩坂 泰信、植松 光夫、小川 利紘、河村 公隆、松見 豊、横内 陽子、
中根 英昭、北 和之、町田 敏暢、白井 知子、小池 真

1) 会員状況について松見より報告があった。

平成12年度会員（平成12年5月31日現在）

一般会員 112名（新規 41名、更新 71名）、学生会員 60名（新規 22名、更新 38名）、
合計 172名 構成内訳 大学関係1/3、研究所関係1/3、学生1/3

参考 平成11年度：一般会員 108名、学生会員 53名、合計 161名

討議の結果、更新していない会員（一般、学生）にメールなどで連絡して更新するように促すことにした。

2) 大気化学研究会運営委員会役員の見直し案提案が植松よりあり討議の後、決定した。

3) 選挙についての事務事項の確認を行った。

投票宛先 海洋研 植松あてとする。会員名簿を作り、公示のニュースレターと一緒に会員へ送る。

選挙権、被選挙権の会員資格は今年の7月末までに会費を納入した会員とする。

スケジュール

2000年 6月	総会にて選挙細則原案の承認
2000年10月	ニュースレター4号で公示、名簿配布、郵送による投票
2000年11月末	投票〆切
2000年12月	開票、結果の公表（メールなど）
2001年 1月	会員総会で報告
2001年 4月	新運営委員会活動開始

- 4) 選挙管理委員会に以下の4名を選出した。
植松 光夫(委員長)、中澤 高清、中根 英昭、梶井 克純
- 5) ニュースレター4号の発行予定について町田(堤の代理)より報告があった。
・大気化学討論会の開催報告
・大気化学勉強会の紹介
・大気化学研究会運営委員会報告
・大気化学シンポジウムの案内
以上の内容で10月頃発行を予定している。
討議により次の記事の追加を行うこととした。IGAC報告(アスペン会議)秋元、近藤
- 6) 次回の第7回大気化学討論会
世話人 大阪府立大学 坂東 博先生。宿泊形態について討議を行った。現在の泊り込み方式か会場だけ設定して各自で宿泊する方式かを討議したが、当面は泊り込み方式にして一巡した後に再検討することとした。

大気化学研究会会員 臨時総会議事録

日時:平成12年6月1日(木)16:30-17:10

場所:鳥羽国際ホテル(大気化学討論会会場)

出席者: 会員 約60名程度

1. 会長(秋元)より挨拶および会員状況報告があった。
2. 選挙規約の報告(中澤)が行われ承認された。
3. 次回の第7回大気化学討論会について報告(秋元)。次回の世話人 大阪府立大 坂東博先生からあいさつがあった。
4. その他として、研究会、討論会の英語名を決めてほしいとの要請あった。

第11回大気化学シンポジウムのご案内

来る1月11日(木)12日(金)、第11回大気化学シンポジウムを下記の通り開催いたします。大気化学シンポジウムでは、グローバルな対流圏および成層圏大気の化学・輸送過程について最新の研究成果を発表しあい、十分時間をかけて密度の濃い議論を行うことを目的としております。また、研究者どうしの情報交換を行い、それぞれの研究プロジェクトの相互理解を深める機会となるよう希望しております。今年度は2日間の日程で、昨年度に引き続き、口頭発表に加えポスターセッションを予定しております。一部の発表をポスターとして個別にじっくり議論を深めてもらうと共に、口頭の発表時間を長くとり十分な議論を行いたいと考えております。申し込み締め切りは11月17日です。大気化学研究の幅広い分野から、多数ご参加くださるようお知らせ申し上げます。

日程:2000年1月11日(木)午前 - 12日(金)午後

場所:ホテルアソシア豊橋 (JR豊橋駅ビル内)

世話人:東京大学先端科学技術研究センター 近藤 豊、名古屋大学太陽地球環境研究所 松見 豊

連絡先: Tel: 0533-89-5192、Fax: 0533-89-5161、

e-mail: taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

前回(第3号)のニュースレターの訂正

第6回IGACのSession1 Biosphere-Atmosphere Interaction 報告は、報告者が農業環境技術研究所 田辺清人となっておりますが、農業環境技術研究所 鶴田 治雄の間違いです。訂正してお詫びします。

発行: 大気化学研究会ニュースレター編集委員会(堤、中根、町田、白井)

連絡先: 〒442-8507 豊川市穂ノ原3-13 名古屋大学 太陽地球環境研究所 第1部門気付
大気化学研究会事務局

電話: 0533-89-5160 ファックス: 0533-89-5161

電子メール: taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www1/div1/taikiken/>